

留学生による「絵本読み聞かせ」活動

—留学生・大学・地域との連携を目指して—

Reading picture books to children by international students
---Aiming at the collaboration among the international students,
the university, and the regional community---

大山 隆子¹ 橋本 弘美¹
Takako Ohyama² Hiromi Hashimoto²

要旨

札幌キャンパス短期日本語集中コースでは、留学生、大学、地域の交流を目指し、北欧の留学生による「絵本読み聞かせ」の活動を2回実施した。1回目は当キャンパスにおいて公開講座の形で行い、2回目は、恵庭市教育委員会の協力のもと、恵庭市立図書館で実施した。本稿では、これらの活動についての報告を行う。

キーワード：留学生、日本語コース、絵本読み聞かせ、地域、交流

Keywords: International student, Japanese language course, Reading picture book to children, Regional community, Cultural exchange

1. はじめに

札幌キャンパスでは北欧交流の推進を目指し、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドからの北欧留学生を対象に短期日本語集中コースを実施している。また、当キャンパスでは、「地域に貢献する」という方針を定め³、地域の人々や一般市民とともに、教育を深く考える交流の機会を持っている。短期留学生日本語コースにおいても、留学生、大学、地域との連携を目指し、留学生による「絵本読み聞かせ」活動を2007年6月札幌キャンパスにおいて公開講座の形で実施した。また、大学近隣の地域に止まらず、より広い地域への発信として、恵庭市教育委員会の協力のもと、同月、恵庭市立図書館でも「絵本読み聞かせ」活動を実施した⁴。この実践の概略は、学会で報告した(橋本他2008)。

2. これまでの背景

当キャンパスでは、北欧からの留学生が来ているということで、近隣の小、中、高校等から、

¹ 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科, 005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Department of International Communications, School of International Cultural Relation, Tokai University, 5-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

³ 「座学を实践へと結びつける」を指針とし、積極的に大学の外に飛び出すフィールドワークや、地域活動への参加により地域に貢献できる人材を育てることを国際文化部の特色としてあげている(2010年度版東海大学GUIDE BOOK)。

⁴ 企画実施については当キャンパス国際文化学部教授川崎一彦氏と同教授吉村卓也氏の協力があった。

国際交流の時間を持ちたいという要望が多い。学校側からのプログラムは用意されたものがほとんどで、日本語コース側もそれらをそのまま受け入れてきた現状があった。

小、中、高校と、国際交流の時間を持つことは大変意味のあることである。また大学側も、地域とのつながりを積極的に推し進めている。ただその結果を見ると、留学生の交流に関しては、いわゆる「外国からのお客様」として扱われることが多い。できれば双方で協働⁵して何かを作り上げ、日本語コースとしても発信していきたい、という能動的な思いが募ってきていた。

3. なぜ「絵本読み聞かせ」なのか

「絵本」という手段を取り入れた理由は、前年度のプロジェクト（イプセン演劇上演への取り組み）の反省点に基づいている。2006年度に12名の留学生と演劇の上演を試みた。しかし、実施後の課題として、舞台に立てる留学生が全員ではなかったため、プロジェクトへの関わりかたに温度差があったこと、教師主導で行われたことなどがあった。その反省点に基づき、今回は、全員が活動に関われるものであること、また、学生が主導権を持って行うことができるような活動を目指した。その条件を満たすものとして考えたのが、「絵本の読み聞かせ」である。本学への留学生は、近年さまざまな分野で注目を集めている北欧の留学生が主流である。北欧といえば、子育て・教育が高い評価を得ている。北欧の絵本や童話の中では、「長くつ下のピッピ」「ムーミン」「アンデルセン」「ニルスの不思議な旅」など、私たち日本人に親しまれている作品も多い。そこで、読み聞かせを行う絵本は、彼らの国でよく親しまれているものにした。また、絵本の読み聞かせは、演劇の舞台に比べ、前に立つことにそれほど抵抗がなく全員が活動に参加できること、聞き手である子どもたちから直接反応が返ってくること、また絵本から独特の台詞、擬音語、擬態語、文末のスタイル、語彙など様々な表現を学ぶことができると考えた。今回は自国の絵本を留学生が日本語とスウェーデン語で読み、伝えるという活動で、本学日本語コースのプロジェクトとして行った。読み聞かせを行う対象者は、地域に住む子どもたちであり、この取り組みは、留学生・大学・地域のつながりを考える上でも、最適であると考えた。

4. 恵庭市立図書館との取り組み

札幌近郊にある恵庭市では、2003年度から月に一度、市内に住む外国人に依頼して、子どもに外国語の絵本を原語で読み聞かせる「BALLOON（バルーン）おはなし会」を実施している。そこで当大学の日本語コースでは、この活動に共感し、留学生の日本語にとっても効果があるのではないかと考え、恵庭市立図書館と協働でこの企画を進めた。これまでスウェーデン人の読み手はなく、初めて聞くスウェーデン語やスウェーデン人が話す日本語は、子どもたちにとってもいい体験になるだろうとのことであった。広い地域を視野におき、恵庭図書館に通ってくる人々との交流、および日本語教育としての発信を目的に、留学生による「絵本読み聞かせ」を実施することとした。

この取り組みは、恵庭市教育委員会主催のもとに行われ、スウェーデンの言葉や文化、風習等に触れ、子どもから大人まで物語の世界に浸りながら、楽しく国際理解を深める時間を提供するもの

⁵ 「協働(collaboration)」を互いに協力して何かをつくりあげる創造的な活動を行うこととし、そこではひとりではなしえなかった創発が起きると考える。そして協働がおきることを目指した学習を「協働的学習」と呼ぶ(舘岡 2005 (p.96))。

である。従来の「外国からのお客様」であった留学生が、自ら出向き、地域と手をつなぎ、プロジェクトを行っていく初めての試みである。このプロジェクトのために、何度も恵庭市との打ち合わせを重ね、連携を深めてきた。

5. 活動の内容と過程

5-1. 活動を行った留学生

スウェーデン・ヨーテボリ大学からの留学生 12 (男子学生 7 名 / 女子学生 5 名) と、スウェーデン・ダーラナ大学からの男子学生 1 名の、合計 13 名である。留学生は、1 年間母国で日本語を勉強してきた。レベルは初中級である。

5-2. 準備活動とその過程

留学生には来日以前から、今回の日本語コースでの「絵本で学ぶ日本語」の授業内容を伝え、Eメールにて連絡を取り合っていた。留学生には事前に、スウェーデンの有名な絵本や子どもの頃に慣れ親しんだ絵本を 1 人 1 冊から 2 冊、持ってきてもらうよう依頼した。

来日後の日本語コースの授業では、9 週間⁶の日本語コースの中に、週 1 回 90 分、計 8 回、絵本読み聞かせのための準備クラスを設けた。教室は日本語の授業を行っていたいつもの教室とは異なる広い教室で行い、床に数枚の毛布などを敷き、靴を脱ぎ、全員が車座になれるよう、絵本を読むのに適したリラックスした空間を作った。



図 1 教室での練習の様子

8 回分の具体的な授業の流れと、本番は以下の通りである。

【1 回目】

「絵本読み聞かせ」準備クラスの 1 回目は、日本語教師 2 名がそれぞれ好きな絵本を持ち寄り、留学生に子どもの気分を味わってもらいながら、絵本の世界へといざなった。留学生にとっては初めての体験になった。

その後、留学生が母国から持ち寄った絵本を全員で検討しながら、読み聞かせの本を決定し

⁶ 一週間の授業は、90 分×10 コマであり、そのうちの 1 コマを絵本読み聞かせのための準備クラスに当てた。

た。選考基準としては、日本語で書かれた同じ絵本があるもの、13人が関われるように13ページ以上ある本とした。選んだ絵本のタイトルは、エリサ・ベスコフ作『ブルーベリーもりでのプッテのぼうけん⁷』(全16ページ)である。その絵本で、まず教師は模範読みを行った。彼らのスウェーデン語の絵本が日本語で読み語られるのを、留学生は興味深そうに、そして真剣に聴き入っていた。

【2回目】

前回同様、教室には、毛布を敷き、靴を脱ぎ、リラックスして、前回選んだ絵本のスウェーデン語の意味を確認するために、1人がスウェーデン語のページを読み、それに続いてもう1人が日本語の同じページを読んでいった。全員が車座になり、絵本を回して読んだ。

【3回目】

日本語版16ページ、スウェーデン語版16ページ、計32ページのを、最初に日本語版で1ページ読み、次に、聞いている子どもたちにスウェーデン語のリズム・言葉を知ってもらうため、スウェーデン語で同じページを読むことにした。留学生の希望をとり、自分の読むページを決めた。

【4回目】

毛布の上に仰向けになって寝てもらい、目を閉じてリラックスした状態を作ってもらった。そして、教師が読み上げる本文に重ねるように読むシャドーイングを行った。日本語のリズム、イントネーションを体で味わってもらうことを目的とした。台詞の部分なども、声色を変えるなど表現豊かに読む感覚も掴んでもらった。その後、ペアになり、各自の分担ページを練習する。教師はそれぞれのグループを回り、イントネーションや言葉の意味などの確認を行った。

【5回目】

留学生は、子どもたちの視点や目線を意識し、絵本を持ち上げる高さや、本を持つ手の位置、椅子に座る位置なども、意見を出し合い、見せ方も検討した。練習も引き続き行った。

【6回目】

上記のような練習を引き続き行い、当日の「読み聞かせ」に与えられた45分間の配分について考えた。子どもたちの集中力を考え、読み聞かせのほかに、子どもたちに喜ばれそうな動きのある日本語の童謡、スウェーデンの童謡、手遊びなどをすることにした。

【7回目】

子どもたちが留学生の名前がわかるように、首から下げる大きな名札を作った。また、子どもを引き付けるような導入、挨拶、自己紹介、手遊び、歌の説明、日本語の歌詞、お礼の言葉などを考えた。

⁷ エリサ・ベスコフ作・絵(1977)、本には「読んであげるなら4才から。じぶんで読むなら小学校初級から」とある。

【8回目】

時間を計り、本番同様のリハーサルを行った。

6. 実施内容と結果

6-1. 北海道東海大学（旧）公開講座

2007年6月2日（土）、北海道東海大学（旧）のキャンパスにおいて、「北欧の子育てと教育 & 絵本読み聞かせ」というテーマの公開講座形式で実施された。時間は14時から15時半まで行われた。講座は2部構成になっており、I部では、川崎一彦教授（国際文化学部教授）、リレモル夫妻による「スウェーデンの子育てと教育」というテーマで講演を45分、この間、子どもたちには隣の教室で託児⁸がなされた。後半II部では、講演を聞いていた大人と託児を受けていた子どもが読み聞かせの教室に集まり、スウェーデン語と日本語で「留学生による絵本読み聞かせ」が行われた。終了後は留学生が練習したスウェーデンの手遊び、歌も披露された。I部、II部と託児は、すべて無料で実施した。

参加者は、大人36名、子ども20名（2歳から小学校低学年）であった。参加者の中には、外国人が日本語を話すのをはじめて聞く子どもたちや親もいた。講座終了後は、留学生が日本語で子供たちとの時間を持ち、地域の中に自然と溶け込んでいたようであった。ある留学生は「6歳の女の子がずっと、自分の手を握っていてくれた」と話し、「小さなお友だちができた」と喜んでいて。その後、参加者からも家に招待されるなど、いくつかの機会に発展していった。



図2 公開講座での子ども達との交流の様子)

6-2. 恵庭市立図書館「長くつ下のピッピの国のお話会～スウェーデン留学生による読み語り」

2007年6月13日、恵庭市立図書館、視聴覚室において、「長くつ下のピッピの国のお話会～スウェーデン留学生による読み語り」と題した「絵本読み聞かせ」を日本語とスウェーデン語

⁸ 託児は東海大学札幌キャンパス教授吉村卓也氏の協力で、託児グループ「ぐるんぱ」に委託。

で行った。また、留学生がアイデアを出し合ったスウェーデンの童謡、手遊びなども子どもたちと行った。参加者は親子連れや市民など約 50 人が参加した。子どもたちは、初めて会うスウェーデン人を、興味深く見つけ、読み聞かせを熱心に聞き入っていた。終了後、参加者からは、「国の名前だけは知っていたが、留学生に会い、スウェーデンが身近になり好きになった」との声が聞けた。イベント終了後も留学生との記念撮影や親交を深める参加者の姿が見られた。

7. 得られた効果および考察

今回のこの取り組みは、地域と連携を取りながら、一つのプロジェクトを進めた達成感があったと思われる。絵本という媒体を通して、子どもたちは、留学生が一生懸命に語る日本語に聞き入った。また北海道の人々にとっては、あまり馴染みのなかった北欧の絵本や文化を知ってもらう機会にもなったと言えるだろう。

そして、日本語を学ぶ留学生にとっては、日本語のクラスにとどまっているだけではなく、大学から離れた地域にも出て、実際にいろいろな年代の日本人と交流し、日本語を話すのにも自信を深めたと考える。具体的には、「日本語での挨拶、絵本や歌の説明、主となる絵本に関する日本語、子供たちの日本語などが勉強になった」との声が聞かれた。また、前回の活動の課題であった、留学生が積極的に構成内容を考え学習者主導に進められた点、留学生全員がステージに立てた点も評価できると考える。

今回の活動は、一方的に用意された「外国からのお客様」のスケジュールをこなしたのではなく、留学生、大学、地域で意見を出し合い、打ち合わせを重ねた成果であると言えるだろう。

具体的な実践の内容等には、色々な課題や反省点も残ったが、日本語教室から地域に発信していったという取り組みそのものは評価できると考える。

この実践を通して、この活動の中心になった留学生、絵本読み聞かせに参加した地域の子どもたち、その両親も、それまであまり接点のなかった留学生や彼らの国に対して関心を深めたと思える。また、この活動は、新聞報道⁹・メディア関連を通し、大学の PR にもつながった。なお、この取り組みは、読書コミュニティー主催の『第3回読み聞かせボランティア大賞』の「奨励賞」¹⁰を受賞することができた。

8. 今後に向けて

今回の「絵本読み聞かせ」では、スウェーデン語と日本語が同時に聞けるという利点はあったものの、同時に難しさも感じた。参加者からは、「絵本が少し長すぎて、子どもの集中力が保てなかった」などの声もあり、どのような絵本が読み聞かせに適しているのか、読み方の方法などについて、より深い知識も求められるのではないだろうか。今後検討を重ねていくことが必要であると思われる。

留学生・大学・地域との連携を目指し、絵本読み聞かせを軸に活動を行ってみたが、反響が

⁹ 北海道新聞千歳・恵庭版 2007 年（平成 19 年）6 月 15 日掲載、千歳民報 2007 年 6 月 14 日掲載、千歳・恵庭エリアの生活情報誌「chanto」2007 年 6 月 29 日第 44 号掲載。

¹⁰ 第3回読み聞かせボランティア大賞（平成 19 年 7 月 20 日）読書コミュニティーネットワーク主催・一般の部、奨励賞受賞「北欧からきた留学生の絵本読み聞かせ」。

大きく、さらなる活動への自信となった。日本語教育も、教室だけではなく、大学を巻き込み、地域と連携しながら外に向かって実践していくことの重要性を再認識した。今後はさらに新しい取り組みも視野に入れていきたい。

参考文献

- エリサ・ベスコフ作・絵, おのでらゆりこ訳 (1977), 『ブルーベリーもりでのプッテのぼうけんー世界傑作絵本シリーズ・スウェーデンの本ー』, 福音館書店
- 舘岡洋子 (2005), 『ひとりで読むことからピアリーディング』 東海大学出版会, 94-105
- 橋本弘美, 大山隆子 (2008), 「留学生・大学・地域との関連を目指した日本語コース実践授業ー「絵本読み聞かせ」への取り組みー」, 『「実践研究からの発信ー記述・分析そして共有へー教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム」予稿集』, 日本語教育学会, 19-22

(受付：2009年8月28日, 受理：2009年10月6日)